福沢諭吉文章の研究

―蓮如『御文章』からの影響を中心に―

大田美和子

はじめに

福沢諭吉―それは、明治日本における偉大な先覚者、そして、時代の教育者の名である。福沢は、「一国独立」を願い、民衆の啓蒙に生涯を傾けた。そのために彼がとったのは、一に筆である。

(一) 研究のめあて

誇大難解な旧文体を否定し、平明な新平俗文体の創始へ―福沢の近代文章史上における業績は、早くから、指摘され、たたえられてきた。

事実、福沢の文章は、今日読むわたくしたちをも引きつける力を持つ。用語の平易と論理の明晰をかねそなえた、達意の名文である。啓蒙家福沢が、文章製作上大きくめざしたのは、文章の平易化である。そのための一つのくふう、それは、蓮如『御文章』に、平俗な「仮名交り」文を学ぶことであった。そこで、わたくしは、福沢文章考察の第一歩を、ここに起こすことにした。

蓮如から福沢（『学問のすゝめ』を主に）への影響を考察することによって、福沢の文章が持つ平明さに迫りたいと思う。

(二) 福沢の文章製作観

福沢晩年（明治三十年）に出版された『福沢全集緒言』で、彼は自分の文章製作観を、次のように述べる。

「自分の文章は最初より世俗と決心し、世俗通用の俗文を以て世俗を文明に導くこと恰も真宗の開祖親鸞上人が自から肉食して肉食の男女を教化したるの顰に倣ひ、何処までも世俗平易の文章法を押し通し、世俗と共に文明の佳境に達せんとするの本願にして、曾て初一念を変じたるなき云々」

（岩波・福沢諭吉全集一P8）（以下傍点大田）

福沢の、俗文主義に対する不動の確信がうかがえる。

(三) 文章平易化へのくふう一つ

「世俗通用の俗文」主義を実践に移すため、福沢は種々のくふうを用いた。その一つは、浄土真宗の教えを俗耳に入りやすく説いた、蓮如の『御文章』に、平俗な「仮名交り」文を学ぶことであった。十七、八の頃、中津で『御文章』の名文であることを耳にし

た福沢は「其後数年を経て江戸に来り洋書翻訳を試るときに至りて前年の事を思出し、右御文章の合本一冊を買求めて之を見れば、如何にも平易なる仮名交りの文章にして甚だ読易し。是れは面白しとて幾度も通覧熟読して一時は暗記したるものもあり。之が為めに仏法の信心発起は疑はしけれども、多少にても仮名文章の風を学び得たるは蓮如上人の功徳なる可し。」（同・P7）と述べている。ここで、蓮如から福沢への影響が問題になってくる。

㈣　蓮如から福沢への影響をうかがう

ともに人口に膾炙された「学問のすゝめ初編」はじめの一節と「白骨の御文章」とを並べてみると、その似通りに、目をみはる思いがする。各々、その一部をあげると、

「学問のすゝめ初編」

天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと云へり。されば天より人を生ずるには、萬人は萬人皆同じ位にして、（中略）各安楽にこの世を渡らしめ給ふの趣意なり。されども今広く此人間世界を見渡すに、かしこき人あり、おろかなる人あり、貧しきもあり、富めるもあり、貴人もあり、下人もありて、其有様雲と泥との相違あるに似たるは何ぞや。其次第甚だ明なり。実語教に、人学ばざれば智なし、智なき者は愚人なりとあり。されば賢人と愚人との別は学ぶと学ばざるとに由て出来るものなり。」（岩波文庫本P11）

「白骨の御文章」

夫人間の浮生なる相をつら〳〵観ずるに、おほよそはかなきものはこの世の始中終まぼろしのごとくなる一期なり。されば、いまだ万歳の人身をうけたりといふ事をきかず。一生すぎやすし、いまにいたりてたれか百年の形躰をたもつべきや。我やさき人やさき、けふともしらずあすともしらず、をくれさきだつ人はもとのしづくすえの露よりもしげしといへり。されば、朝には紅顔ありて夕には白骨となれる身なり。（中略）あわれといふも中々おろかなり。されば、人間のはかなき事は老少不定のさかひなれば、たれの人もはやく後生の一大事を心にかけて、阿弥陀仏をふかくたのみまひらせて、念仏まふすべきものなり。（『蓮如上人遺文集』緒文集21）

一例を「……と云へり。されば……」の続きぐあいにとってみても、そこには、呼吸の一致があるように思う。

㈤　福沢の文章を平明にしている要因
―蓮如『御文章』と共通するもの―

福沢の文章を平明にしている要因はなにか。それを知るために、まず、蓮如・福沢両者の共通性を、表現面と叙述態度・方法の交錯の中に見出していきたい。共通性のあるものは、蓮如から福沢への影響と考えてもよかろう。

以下、項目として立てたものが、叙述態度・方法である。なお、用例の多くは割愛する。

I　俗語の使用

文章製作の際、俗語（庶民の日常語）を使用するという態度は、蓮如・福沢に共通するものである。福沢は、文章平易化のはじめを、単語の平易化においた。できるだけ俗語を用いて、高い内容新しい内容を説き聞かせようとした。

福沢の文章に見る平易な語のうち、特色があり、しかも用例数が多いのは、転義として用いられた、商売用語と民間の仏語である。

商売用語は、次のように用いられる。

後世の孔子を学ぶ者は、時代の考を勘定の内に入れて取捨せざる可らず。二千年前に行はれたる教を其侭にしき写しして明治

年間に行はんとする者は、共に事物の相場を談ず可らざるなり。（学問のすゝめ）

また、民間の仏語が頻出する。功徳・約束・本願・因縁・縁・一大事・一義・大義・安楽世界（一世界・界）・聴聞（者）・必定・決定・安心決定・一念発起・一心一向・安心立命・因果（応報）・衆生済度・老少不定・自業自得など、福沢の文中でしばしば目にするものである。

和漢古今の空学者流が人を愚にせし罪は深と雖ども、此一書の願力に由て其罪業を消滅し、農、工、商、三界の萬霊に開知の功徳を施すを得ん乎。斯の如くならば余が翻訳の労に報るも亦大なりと云ふ可きなり。（帳合之法）

詰る所、他人の熟に依らぬと云ふのが私の本願で、此一義は私が何時発起したやら…（福翁自伝）

ここで注目すべきは、俗文主義に立ち単語の平易化をめざす福沢が、民間の仏語を、転義の形で多く用いているということである。一体、福沢におけるこの態度は、なにに由来するものなのか。また、仏語を俗語として、福沢の意識に、はっきり印したものはなにであったか。わたくしは、ここに、蓮如の『御文章』を精読した福沢を思わずにはいられない。仏語を俗語として自覚し、これを多用した福沢の態度は、彼が『御文章』を読んだことに深くかかわっているものと考えたい。

Ⅱ　叙述形式のくふう

蓮如もとり福沢もとった、叙述の形式がある。しかも、それらの共通する形式は、読者の理解を容易にするもの、と考えられる。以下のように項目分けされる。

①対比

相対立する事物を、並べ論じる。

世の中にむづかしき仕事もあり、やすき仕事もあり。其むづかしき仕事をする者を身分重き人と名づけ、やすき仕事をする者を身分軽き人と云ふ。都て心を用ひ心配する仕事はむづかしくして、手足を用る力役はやすし。（学問のすゝめ）

②対句

漢文に由来する伝統的修辞法を、福沢は、単にレトリックとしてだけではなく、論理的分析表現として生かしている。

学問とは広き言葉にて、無形の学問もあり、有形の学問もあり。（学問のすゝめ）

③列挙

一事を分析し、分析した個々を同一叙述形式をもって列挙する。これによって、列挙された個々は明確となり、全体の把握は確かなものとなる。

故に議論は外物に縁なきものと云ふも可なり。必竟内に存するものなり、自由なるものなり、制限なきものなり。（学問のすゝめ）

④反復

ことばをかえて、内一内容をくり返し述べる。

それおもんみれば、人間はたゞ電光朝露のゆめまぼろしのあひだのたのしみぞかし。（蓮如御文章）

⑤累加

結論提示の一法。顕著なのは、否定をたたみかけその上に結論を開示するものである。

抑その信心をとらんずるには、さらに智恵も（いらず）才学もいらず、富貴も貧窮もいらず、善人も悪人もいらず、男子も女人もいらず、たゞもろ〳〵の雑行をすてゝ正行に帰するをもて本意とす。（御文章）

⑥鎖状展開

原因と結果が鎖状に連なり論が進展する。AならばB、BならばC、Cならば……と述べ進む。

独立の気力なき者は必ず人に依頼す、人に依頼する者は必ず人を恐る、人を恐る者は必ず人に諛ふものなり。（学問のすゝめ）

⑦訴えかけの表現

読者・聴者の心に直接、問いかけ訴えかける。疑問・反語・感嘆・命令の表現をとる。花樹を培養して花を開くに、何ぞ殊更に之を避くることを為んや。（学問のすゝめ）

試に思へ、世間の士君子、一旦の偶然に人に遭ふて生涯の親友たる者あるに非ずや。（学問のすゝめ）

⑧問答体のとり入れ

問答形式により疑問を解いていく。『御文章』に多く、福沢の『啓蒙手習之文』にも見える。

⑨リズム

文章のもつリズム（外在律）は、そのままでは平明につながらない。しかし、それは、民衆の口の端に常にのぼせられ、彼らに親しまれる大きな要因となる。福沢の『世界国尽』は、全文七五調でつづられている。

なお、ここで見落してならないのは、蘭如・福沢の文章がもつ内在律である。文章の底を流れる筆者の気魄は、読者の心をとらえる。

⑩句・文の接続様態、文末

接続のことばや指示語の用い様、文末のことばとその語調にも、平明の因はひそんでいる。

Ⅲ たとえ、ことわざの活用

比喩・俗諺の活用は、民衆の啓蒙に効果が大きい。蘭如も福沢も、日常生活に近い卑近な事物をもってたとえている。福沢のたとえは、ときに、いかにもジャーナリスティックな、人の意表をついた表現をとる。

Ⅳ 福沢に顕著な、論構成の態度

福沢の文章が持つ論理の明晰はどこに由来するのか、少しく考えてみたい。

①分析的にとく

二元論的立場に立った分析態度が顕著である。分析した事柄を、対比、あるいは並列して説き進む。

②抽象と具体との調和統一

具体から抽象へ、あるいは抽象から具体へ。場に応じ、そのいずれかをとる。福沢の文章の多くは、具体と抽象とのみごとなないまぜによって成る。

③後述内容のテーマを予告する

各節・章・論内で、そのはじめに、しばしば後述内容のテーマを予告する。

④要約する。

各要所で、前述内容を要約し、確めながら論を展開させる。

⑤論展開の特徴二つ

○一個の命題（結論・事実）を提示→それへの疑問提起→筆者のする端的な解答→解答についての説明細叙

○結論の提示→事実に徴して証明→結論の再確認

おわりに

以上、福沢諭吉の文章が持つ平明さを、蘭如からの影響を中心に考察しようとしたものである。平明という観点に立って見たとき、両者間には、表現面で、また叙述態度・方法の上で、いくつかの共通性が見出された。が、それらは、あくまで共通性であって、それをもって蘭如から福沢への影響であるとの即断はできない。ただわたくしの今回の作業で、影響らしいものが多少姿を現わし、同時に、福沢の文章が持つ平明の要因も分りかけてきたように思う。